

一一年	一八二四	景清六百年遠忌 短冊奉納（願主眞僧薦水、可笛・五明・芳竹助力）	
一二年	一八一五	11・8 太田可笛64没	
一三年	一八一六	「花の下陰」（可笛追悼句集）	
一四年	一八一七	「豊の秋（漢・俳紀行）」安井滄洲編	
文政元年	一八一八	「梅が花（俳紀行）」安井滄洲編	
二年	一八一九	「松がさね」（五明古希祝句集）	
三年	一八二〇	太田芳竹没 追悼句集「けしのなごり」	
四年	一八二一	9・23 日高（小村）五明72没	
文政六年	一八二三	「もとの月夜」（五明追悼句集）	乙二69没
一〇年	一八二七		瓦全82没
天保五年	一八三四		一茶65没
六年	一八三五	野田泉光院没	
一二年	一八四一	小村明之67没 「さぐりつけしう」（明之追悼句集）	「俳諧名家帖」末尾に同年十二月調之の識語 五木の「俳諧素玄問答」Ⅱ（多計都恵集）付載）なる 五木天保十二年55以降大阪定住
弘化二年	一八四五	本庄・日高習之没	
四年	一八四七	美々津・日高吟龍没	
嘉永元年	一八四八	この頃、岩切正葩の古希賀集「松賀佐根」出る	正月島津五木62没
安政五年	一八五八	本庄・菊池尚故没	

〔平成六年十二月十日受理〕

寛政	三年	一七八三	江戸狂歌最盛
五年	一七八五	清武太田治水没 治水追悼句集	麦水63没 蕪村68没 也有82没
七年	一七八七		蓼太70没 松平定信老中、儉約令
元年	一七八九		几薰49没 黄表紙発禁
二年	一七九〇		洒落本版行禁止、初代川柳73没
三年	一七九一		青羅52没 白雄53没
四年	一七九二		暁台61没
五年	一七九三		芭蕉百回忌各地に行わる
七年	一七九五		蝶夢64没 素丸83没
八年	一七九六	俳紀行「昼寝の友（稿本）」安井滄洲編	百井塘雨没
九年	一七九七	この頃蝶夢三回忌追悼句集「くさのかげ」猶菰・梅雨ら編	
一〇年	一七九八	芭蕉翁三等之文（俳論書）可笛・五明編	関更73没
一二年	一八〇〇	巴国没	
享和元年	一八〇一	「あきの名残」（巴国追善句集）	
文化二年	一八〇五	「尚白集」（漢俳紀行）安井滄洲編	大江丸86没
三年	一八〇六		滑稽本最盛
六年	一八〇九	太田芳竹、可笛・五明の助力で猿蓑塚建立、記念集「さるみのづか」芳竹編	伊能忠敬日向測量
七年	一八一〇	本庄日高圃友没	
八年	一八一一	野田泉光院日本九峯修行のため佐土原を出立（文政元年）「日本九峯修業日記」	士朗71没、伊能忠敬日向測量
九年	一八一二	「雁のわかれ」（圃有追悼句集）	
一〇年	一八一三		

## 日向俳壇史資料

和暦	西暦	日向俳壇状況	日本文学史・その他史的事項
貞享二年	一六八五		内藤風虎67没
元禄五年	一六九二	小村西卜没	松尾芭蕉51没
七年	一六九四		
一五年	一七〇二	大淀三千風日向路に入る	露沾79没
享保一八年	一七三三		
元文三年	一七三八	伊勢の春波・小村西雪に「俳諧秘伝書」を授く	
延享四年	一七四七	内藤備後守政樹延岡に移封（露沾の実子）（俳号沾城）	
明和二年	一七六五	日高（小村）菊路亭に百井塘雨滞留 俳諧指導 この頃から百井塘雨日向に滞留（安永元年）	
三年	一七六六		蕪村・太祇・召波ら新風樹立につとめる
四年	一七六七		田沼意次側用人、田沼時代始まる
七年	一七七〇	清武・雨桂館美津丸没 美津丸追悼句集 施主名録発句集下（城ヶ崎・高岡外）：芭蕉堂奉納句帖	
安永二年	一七七三	6・5菊路没 「星明り」（菊路追悼句集）	太祇没・召波没 『明烏』（几薫編）刊
三年	一七七四		涼袋没 『去来抄』刊 千代尼没
四年	一七七五		蕪村『春泥句集』序に離俗論を掲ぐ 同『夜半楽』『新花摘』『桃李』成る
天明元年	一七八〇	宮崎吉村町仁田脇林耕ら芭蕉塚を建つ（浮之城正光寺）	樽良没 諸九尼没 風律没
一七八一			

七十四番 月化（次の「木僊」との関係上先にあげる）

豊後日田の秋風庵月化で、筑紫在住の多くの淡々一派の中で全国的に著名で、数多くの有名無名俳諧師がこの秋風庵に杖をとどめている。姓は広瀬氏で、日田咸宜園の儒学者で知られる広瀬淡窓はその甥にあたり、天明三年からおよそ五年間甥の建を養育している。文政五年正月晦日七十六歳でこの秋風庵で没している。その時建は四十一歳で淡窓と号して庵の東北の咸宜園で既に儒を講じていた。（大内氏『研究』による）

七十二番 木僊

半時庵淡々の門流の中で後代もっとも繁栄したのが八千坊系と呼ばれる一派で、八千坊は高弟舎椿を一世とし次の如く伝流している。

芭蕉翁―其角―淡々―<sup>初</sup>舎椿―<sup>二世</sup>駝岳―<sup>三世</sup>屋烏―<sup>四世</sup>淡  
叟―<sup>五世</sup>其山―

この八千坊系の勢力を築く上に功績のあった舎椿・<sup>二世</sup>駝岳（延岡の駝岳とは別人）・屋烏と九州俳壇との関係は深いものがあつた。

A 八千坊一世舎椿は安永六年八月三日七十一歳で世を辞したが翌七年秋一周忌集として『如是日記』三冊が梓行されて、それに舎椿死没前後の詳細な記事が掲載されている。それによると、舎椿がすぐる年の秋豊後日田に杖を曳き月化（その頃は桃潮の号）の亭に雪の降る頃まで滞在している。そのことは『広瀬家譜』にもふれてあり、この来遊の折桃潮こと月化が舎椿に入門したとされている。大内氏は月化二十歳前の明和頃のことであろうとされている。

B この八千坊二世の駝岳Ⅱ夷柏は晩年木仙の号を用いた。これがまた木僊の別号で、門弟屋烏筆「先師木僊伝」がある。この夷柏こと木僊はまた天明二年筑紫行脚の途、四月十四日に豊後日田の月化

宅秋風庵に宿り、「俳諧数日いとまなし」という状態であつた。付記すれば、夷柏が月化を訪れる三日前に建（後の淡窓）、幼名寅之助が生まれており、伯父月化の喜びが窺えるのである。

七十八番 樗堂

伊予松山の人で、栗田専助、名は政範、暁台門で、二畳庵の号を持ち、一茶も旅次、立ち寄ったことがある。文化十一年（一八一四）六十六歳で没している。月化の門人、豊後高田の弗水はこの樗堂の教えも受けている。（『俳諧大辞典』、大内氏『研究』による）

なお捜すべき資料としては平成五年十一月刊の大内初夫氏監修の『時雨會集』（義仲寺発行）などがあるが、これらはすべて次の機会に委ね、今回は割愛に従うこととする。

参考した資料はそのつどあげておいたが、まとめて末尾に掲げておく。

『日向俳壇史』 杉田作郎著 日向文庫 昭和二十九年刊  
『俳諧大辞典』 明治書院刊 昭和三十二年刊  
『近世九州俳壇史の研究』 大内初夫著 昭和五十八年刊  
『先達逍遙』（杉田文庫）から 山口保明 宮崎日日新聞連載  
昭和六十三年

参考までに日向俳壇史年表を添えておく。

で、芭蕉の句に因<sup>ちな</sup>む「木のもと」という名瓢を得て、各地の諸名家に題詠画賛を乞い、これを巻子本に仕立てたこと、これが「瓢（ひさご）の巻」で現在県総合博物館蔵となっていること、序文を天保の三宗匠の一、桜井梅室がものしたこと、日付は天保四年（一八三三）の夏で、〈賛〉を寄せた人々に大阪の篠崎小竹をはじめ、広瀬淡窓、田能村竹田らがあり、近隣の俳人で句を寄せたものをあげている中に延岡の後藤双鳥、穂鷹亭々、小森駝岳らがいることを紹介されている（宮崎日日新聞・昭和63・9・1付）。天保十二年には四十四歳であったことになる。

#### 二十七番 五木

延岡の島津五木（五木庵五木）は夷柏（木僊）門人で、一肖（駝岳―駝岳については後出―）とも親交があり、天保三、四年頃から行脚の生活を送り、同十二年に上阪して難波で宗匠として活躍している（大内氏『研究』による）。なお五木についての紹介は山口氏の「先達逍遥」③③―宮崎日日新聞・昭和63・8・26―にもなされている。

#### 三十四番 呂国

『俳諧大辞典』『近世九州俳壇史の研究』によれば、大阪の人松木淡々のことで、淡々ならば宝暦十一年（一七六一）八十八歳で没している。この呂国の号は、淡々が若い頃、晩年の芭蕉からもらった俳号であり、淡々を名乗った後の享保十五年（一七三〇）刊の淡々編『神のなへ』に延岡の俳人十一名が入集している中に、先の十一番の花径と同じ花径の名が出てくるということである（大内・山口氏）が、そうすると、享保十五年（一七三〇）の句集『神のなへ』

中の花径と、文化十一年（一八一四）の句集『青陽帖』中の花径と二人の花径が存在することになり、年代的にあわない不審が残るので、二人の花径についてはなお周辺を照合してみる必要がある。

#### 三十五番 駝岳

『日向俳壇史』によれば、小森姓で、寛政四年（一七九二）延岡新小路に生れ、早く大阪に出て八千坊門に親しみ、晩年は延岡に帰って風流三昧に世を送り、安政四年（一八五七）六十六歳で没している。大内氏によれば「天保元年（一八三〇）二月二十四日七十六歳で没した屋鳥の後を継いで八千坊四世となったのは日向延岡出身の一肖で、「晩年は駝岳庵駝岳の号を用い」たと『日向俳壇史』を引いて述べておられる。駝岳という俳号については、管見の限りでは八千坊二世駝岳である夷柏Ⅱ晩年の木仙Ⅱ木遷と八千坊四世延岡出身の駝岳（一肖）の二人いることになるのでその点もなお周辺を照合してみる必要がある。

#### 六十九番 成美

姓は夏目、江戸の人、十六歳で浅草の札産業の家督を継ぐ。父宗成の影響で少時から俳諧に遊び、初め二世祇徳、蓼太と、天明以後は白雄、暁台と相識したが、一定の流派には属さなかった。几董、乙二らと親しく一茶に対しては始終庇護者の立場にあった。人格円満で、長者の風格を具え、また古書に通暁して、『随斎諧話』『七部集纂笈』など好著を残している。寛政・文化の頃大家として仰がれていたことは、需めに応じて書いた夥しい序・跋の類からも明らかである。

わか古郷の親しき人／＼登り来ましてなには津の世わたりは  
いかにとたつねられて

安い米喰ふてねられぬ月夜かな

ナニハ 吾萍

とあり、推測ながら吾萍と城ヶ崎周辺の俳人との往来は終生親しく  
つづいていたことが窺える。なお赤江城ヶ崎俳壇と瓦全との親交に  
ついて、また吾萍について同じ難波の相伴大江丸との親交、可笛に  
ついては蕪村との交友を右『日向俳壇史』で知ることができる。こ  
の『日向俳壇史』以後の調査研究では、九州一円の俳人、俳書、俳  
壇、その交流関係については、博搜博覧で知られる大内初夫氏の名  
著『近世九州俳壇史の研究』（九州大学出版会 昭和五十八年刊）  
に蝶夢、瓦全と日向俳壇との深い関係が説明されていて参考になる。  
次の覚書は名家帖に集められている短冊から、先述のもの以外で  
名の知られている俳人について、俳業にふれ流派関係なども明らか  
にする傍ら、名家帖に句が遺された経緯が臆げなりと明らかにする  
一助にもと後考に備えるものである。頭書番号の若い順に掲げる。

# 一・二・七十六番 瓦全

瓦全は京の人で、五升庵二世と呼ばれるが、その師は蝶夢法師で、  
蝶夢は芭蕉の「春立つや新年古き米五升」の句からその住居と称号  
を五升庵と名付け、芭蕉復帰、顕彰運動に力を注いだ。この人こそ  
赤江城ヶ崎俳壇を指導し、その名を上方に知らしめた功労者であつ  
た。その衣鉢を継いで、城ヶ崎を中心とする日向俳壇を指導したの  
が五升庵二世柏原瓦全で、彼は宮崎における芭蕉句碑の建立や句集  
出版に助言を与え、自らの年刊句集「さくら会」に多くの日向俳人  
を登壇させている。文化、文政期は瓦全の助力によって日向俳壇は  
全盛期を招来する。付言すると宮崎県立図書館に寄贈されている

「杉田文庫」には△二世五升庵瓦全書簡集△が残されており、日向  
俳壇事情を知る好個の資料となっている。なお城ヶ崎俳壇が上梓し  
た撰集、「可笛追悼句集」・「五明追悼句集」には跋文や序文を  
寄せていて、どちらも「杉田文庫」に収められている。（以上『日  
向俳壇史』と山口保明氏の「先達逍遥」<sup>③〇</sup>―宮崎日日新聞・昭和  
63・8・4―による）

瓦全が文政八年（一八二五）一月に没し行年八十二歳とすれば、  
一・二の瓦全短冊は裏面に八十一翁と年齢注記があるので文政七年  
の書ということになり、それが天保十二年（一八四一）にこの名家  
帖に「調之」収められたことになる。七十六番も瓦全の短冊である  
が、こちらには「京 瓦全」とあるだけで年齢の注記はない。瓦全  
の短冊三葉を同一人が所持していたとすれば、その他の俳人につい  
ては一枚ずつであることから、所持者（この名家帖に「調之」えた  
人）は特に瓦全に親近の人であつたろう。

# 十一番 花径

『近世九州俳壇史の研究』によると、八千坊門の年刊句集『青陽  
帖』の文化十一甲戌（一八一四）のものに延岡から十六名の投句が  
なされていてその中に花径の名が出て来る。（花径については後出  
呂国 の項で再考）

# 二十二番 月雄

『日向俳壇史』によれば、姓は鎌田で、梅賀庵と号し、寛政十年  
（二七九八）富高新町に生れ、裕福で広く全国の俳人と交際してい  
たこと、嘉永三年（一八五〇）正月五十三歳で没したことが知られ  
る。山口氏の「先達逍遥」<sup>③4</sup>―梅賀庵月雄―によると彼は愛瓢家

地域別俳人名表

(句番号は文中、漢数字で示して来たが、この表では便宜上算用数字で示した。)

国(地域)名	句番号付俳号	枚数
日向(延岡)	10 瓢乎 11 花径 14 壽臺 19 観之	7
〃(富高)	24 <input type="checkbox"/> 27 五木 35 駝岳	1
〃(城崎)	22 月雄 42 由菊亭 <input type="checkbox"/> 43 <input type="checkbox"/>	2
〃(都城)	13 亀候 16 一風 37 <input type="checkbox"/> 羅 40 枕秋 74 月化	1
豊後(日田)	26 似洗 <sup>七七変</sup> 37 <input type="checkbox"/> 羅 40 枕秋 74 月化	4
〃(佐伯)	12 宗馬 50 孤雲	2
〃(竹田)	17 双門	1
〃(不明)	49 葵亭 59 木竜 60 無味翁	3
筑前(不明)	9 関古	1
肥後(彦山)	56 北岳 32 <input type="checkbox"/> 33 <input type="checkbox"/>	1
京	1・2・76 瓦全 18 <input type="checkbox"/> 山 45 <input type="checkbox"/> 46 千崖	8
難波	47 蒼那 68 社昌 70 尺 <input type="checkbox"/> 71 不二	6
江戸	72 木僊 <sup>八十変</sup> 65 吾萍 75 吉兆 38 <input type="checkbox"/> 48 <input type="checkbox"/> 49 <input type="checkbox"/>	7
薩摩	7 菊之 30 懷玉 39 其松 63 翌州	4

伊予	6 山月 78 樗堂	2
但馬	20 閑月 57 竹の舎	2
長崎	28 <input type="checkbox"/> 43 <input type="checkbox"/> 雲	2
近江	54 閑我 66 千影	2
尾張	73 岳輅 79 <input type="checkbox"/> 80 <input type="checkbox"/>	2
加賀	21 完和	1
淡路	51 云界	1
下関	58 羅風	1
三河	44 <input type="checkbox"/>	1
伊勢	77 菊 <input type="checkbox"/>	1
安藝	62 西坡	1
備後	67 桃甫	1
中村	31 正菴	1
タガ	8 正峰	1
不明	25 <input type="checkbox"/> 29 <input type="checkbox"/> 33 <input type="checkbox"/> 36 <sup>八十変</sup> 連心 52 棹月 53 壽堂 55 快雲	9
計	80 呑空 (3・4・5) は和歌ゆえ省いたので計77枚	77

七十一 名月や影□ましのしのお摺

ナニハ 不二

七十二 山汐のからみもなくて愛の水

ナニハ 八十三隻 木僊

七十三 あさなく梅咲かぬ日はなかりけり

ヲハリ 岳輅

七十四 柳ゆかし梅愛し内に居ともなし

フンコ 月化

七十五 花すゝき画んとすれは風に乱れ

ナニハ 吉兆

七十六 おほけなき殿下の御慶にまゐる事を  
ゆるされて

千代の菊萬代を経む君になれて

京 瓦全

七十七 風ふはりく日高い都山

イセ 菊□

七十八 一日の藤美し花の朝

イヨ 樽堂

七十九 秋風や舟よりふねへ行鳥

ヲハリ □□

八十 元旦

ことほきやかはす言葉の花の春

呑空

天保十二辛丑年

十二月中旬調之

短冊に記された国名、地名からみて、その句数にまとまりがある地域は豊後10、延岡地区(富高1を含め)8、京8、江戸7、難波6、ついで薩摩4で、あとは2名以下となる。但し、日向城ヶ崎2、都城1を延岡地区に加えれば日向全体で11となつて最も多いことになる。現在の宮崎・大分地区の合計21は、国(地)名が不明の9句を全句数77から差し引いた68句の概ね30%となり、調査を依頼された方の「宇佐神社に仕えていた人(神官)が宮崎に持ち伝えたもの」という点となにがしかの符合を感じさせるものがある。

これらの俳人のうち句が判読出来て、名が知られ、明治書院刊『俳諧大辞典』(昭和三十三年刊)にも載る俳人は、前記一、二、七十六番の京の瓦全と六十九番の夏目成美(江戸)、七十八番の伊予の樽堂である。地方俳壇史中では、宮崎の故杉田作郎氏の『日向俳壇史』(日向文庫11)(昭和二十九年刊)に延岡の俳人として載る三十五番の小森駝岳と二十七番の島津五木、富高の二十二番鎌田月雄がいる。但しこの三人の短冊は湿気による接着、破損がはげしくてわずかに作者名の俳号が読めるのみの状態である。六十五番の難波の吾萍は、赤江城ヶ崎の商人太田可笛の姉豊が大阪の三よし屋という日向船問屋金田氏に嫁してなした子で、従つて城ヶ崎俳人太田可笛の甥にあたる。右杉田氏の『日向俳壇史』に「可笛は初め二松亭菊路に俳諧を学び、後京都の百井塘雨や、甥の金田吾萍の紹介で、京都岡崎の、五升庵蝶夢の門に入り、蝶夢歿後は五升庵二世瓦全の叱正を受けていた」とあるのからみて、五升庵一世蝶夢・百井塘雨・五升庵二世瓦全と可笛・日向城ヶ崎俳人グループ、難波の吾萍といった親近な俳人がこの名家帖からも窺える。幸い吾萍の句(六十五番)は先掲どおり判読可能で、



四十八	短夜や酒四五合のもり溜り	江戸	□□	六十	五夜鶴聲天下春	ブンコ	無味翁
四十九	雪垣□しつくや春に花さかる	ブンコ	葵亭	六十一	高岡月知梅に霜降月まかり侍りて 初霜の底に匂ふや月知梅	江戸	眉白
五十	□来つる鴉かな	サイキ	孤雲	六十二	松にかゝる雨や小春の薄蒲團	アキ	西坡
五十一	舟に居て□若葉見へにけり	アハザ	云界	六十三	なひきけり秋立朝の茶の煙り	サツマ	翠州
五十二	甫友雅翁の御館にはしめて亀居し奉りて 言の葉も廣き匂ひや桃さくら	□生廻	棹月	六十四	名月やきのふの雨の一むかし	江戸	春蟻
五十三	廣沢も月もなしむや鳴鳥		壽堂	六十五	わか古郷の親しき人く登り来まし てなには津の世わたりはいかにとた つねられて		
五十四	うくひすや咳こらへしもよほとの間	ヲ、ミ	閑我		安い米喰ふてねられぬ月夜かな	ナニハ	吾萍
五十五	梅かゝのみちてあふれて人は留守		快雲	六十六	賀茂川や夜啼鳥はみなちとり	ヲ、ミ	千影
五十六	我庵の衾□に戻る夜に	ヒコサン	北岳	六十七	夜桜や静にふける遠簪	ヒンコ	桃甫
五十七	つく炭をとりの碓の崩しけり	タシマ	竹の舎	六十八	藤の花むしる兒は罪もなし	京	社昌
五十八	露ふたつひとつに成りてこほれけり	下関	羅風	六十九	誰も来よものゝいひたき朝の雪	江戸	成美
五十九	玉若葉此花の名は忘れたり	ブンコ	木竜	七十	もの問へは□梅のぬし	ナニハ	尺□

二十三	酒桶に咲かはりけり杜若	エド	八一	卅六	夏の山月様かりて□にけり	八十翁	連心
二十四 (破損)		延岡	□□	卅七	紅葉見し目もふたかぬに初時雨	ヒタ	□蘿
二十五 (破損)				卅八	呂国と延岡の今山へ花見にまかりて 強い□	江戸	□□
二十六	其時亭宗匠の厚き情を忘れかねて □□□をふり切る袖のもたひなさ フンゴヒタ 七十七叟		似洗	卅九	明にけり□汐のはなかしら	サツマ	其松
二十七 (破損)		延岡	五木	四十	いたつらに折も散さぬ木槿かな	ヒタ	梶秋
二十八	初鷹の□から追ふや浦□	長崎	□□	四十一	水野の□ 妹に□心も□野路の梅		□齋
二十九	□の顔をけふも洗はす菖蒲賣		□□	四十二	今□いせの国子になりて 名月や□桜は散て見せ	城ヶ崎	由菊亭
三十 (破損)		サツマ	懷玉				□□
卅一 (破損)		中村	正菴	四十三	見あけたるこゝろもとらすふしの山	長崎	□雲
卅二 (破損)		ヒコ	□□	四十四	葉を別□仕ふたりや芒の□	ミカハ	□
卅三 (破損)			□□	四十五	雪□松かな	京	□□
卅四 (破損)		ナニワ	呂国	四十六	初時雨蒲團のうへも旅のそら	京	千崖
卅五	枯尾花かけかね□	延岡	駝岳	四十七	朝かほに夫婦の杖をならへけり	京	蒼那

何も記されていない。頭書の漢数字通し番号一、二は瓦全の短冊で、それは変色はしているがひどい傷みはなく、糊がはがれてそれぞれの裏面に同筆に近いと思われる字体で八十一翁五升庵と記されており、七十六の同じく瓦全短冊には表に京とのみあり、一、二よりは若い頃の筆蹟かと思われた。

短冊には概ね国名、地名が記されている。はつきりわかるものは別表の通りで計68枚ある。あとは張りついているとか欠損しているとかして判読不能のものと記載がないものである。

以下可能なかぎり翻読し、次に判読できた範囲内で地域別別人名を、その句の頭書番号を付して表とする。なお、損傷等により判読不能の部分は、字数のわかるときには字数分の□で、字数のわからないときには□で示した。

一  
わたる鳶野の嫁ももとられて

瓦全

十六

またもととき世をさきかけて梅の花

都城  
一風

二  
いつはりはない世なりけり初しくれ

瓦全

十七

る一葉や上にある通り

竹田  
双門

三、四、五は、和歌ゆえ省く。

十八

(破損)

けり

京  
□  
山

六 汐先に四五尺  とられけり

イヨ  
山月

十九

数から  
□  
小春かな

延岡  
觀之

七  
□  
の  
か  
け  
□  
る  
か

カゴシマ  
菊之

二

雨になる曇てはなし初さくら

タジマ  
閑月

八 落兼る葉は箒にてゆすりけり

タガ  
正峰

三十一

若竹や□木にもなき今朝の露

力、  
完和

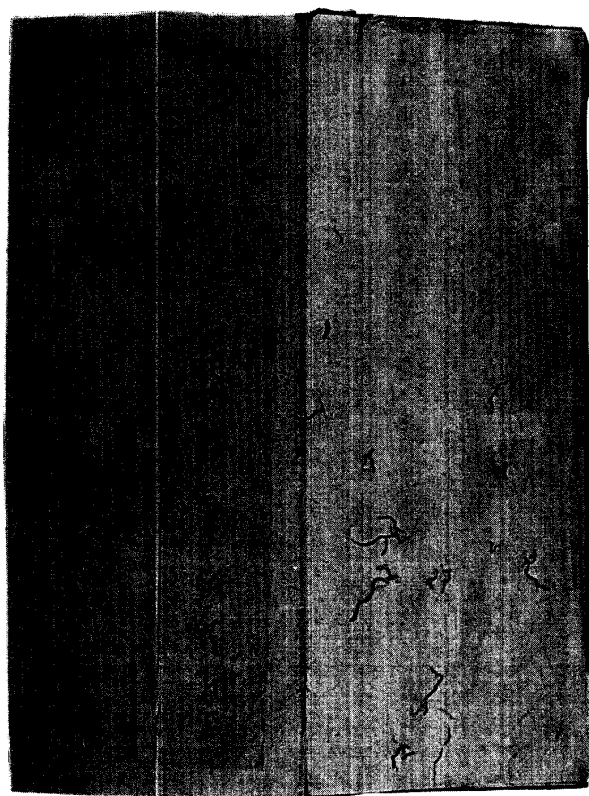
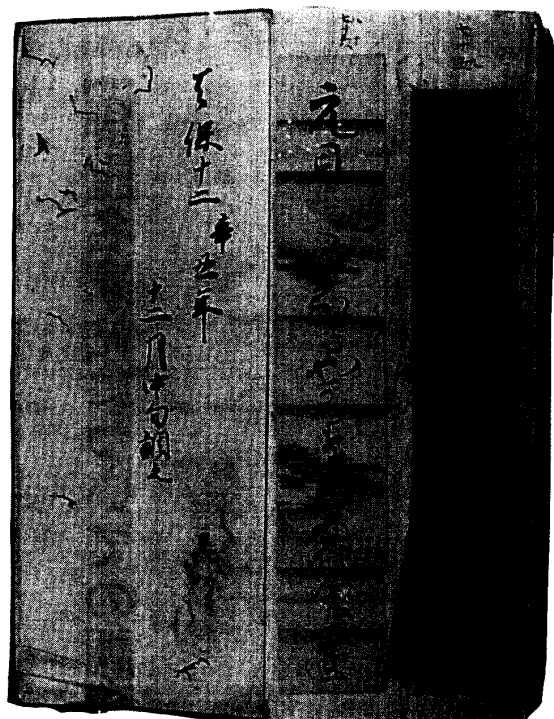
九 物繕ふ山かけさすや更衣

筑前  
関古

三

つゝ持や	箸
------	---

トミタカ  
月雄



## 『俳諧名家帖についての調査』

手許に「俳諧名家帖」なる俳句短冊八十葉余りからなる短冊帖がある。かねて某氏から調査を依頼されていたものであるが、その人も、「五、六代前の先祖が神官として宇佐八幡宮に仕えていたが、宮崎の新名爪八幡宮（現在の住吉神社）に宮司として出向し、やめてのち高岡に移住したが、その頃から家に持ち伝えて来た短冊帖」とだけで、詳しいことはなにもわからないままであった。その先祖の神職がなんという俳号の俳人だったのか、当時の俳人たちの誰とどのような交渉があったのか、八十数葉の短冊を全部その人が集めたのか、それはどのような事情、経路だったのか、あるいは偶然によるものなのか、など詳しいことは現在もまだ何もわかっていない。従ってさし当っては残されているこの「俳諧名家帖」の内部徴証を手がかりに調べてゆくほかはない。それでこれまで少暇あるごとに判読を心掛けていたが、何しろ預かった以前から、保管のよろしくない状態に永くおかれていたものとみえて、大半は湿気のため短冊どうし張りついていたり、それを無理にはがして短冊の紙質によつては細片に千切れて再現不能になっていたりして判読困難なものが余りに多くて、最初一見して、半分も判読できればよい方と考える状態であった。

田尻 龍正  
後藤 多津子

まず書誌的なことから記してゆくと、別掲写真の通り、「俳諧名家帖 全」の題簽が表紙に墨書されており、それを納めた木箱は塗り物で、その蓋にほとんど同筆と思われる字体で「俳諧名家帖 入」と墨書されている。帖本体は、縦四〇二ミリ、横一五五ミリ、厚サ二二ミリあり、（木箱は縦四二二ミリ、横一六八ミリ、深サ二七ミリ）折本形式の旋風装で、その各頁にそれぞれ左右に二枚づつ短冊が貼付され、その各上部に、通して漢数字で、一から八十まで番号を記してある。頭書のこの通し番号は当然あとから誰かが注記したものと思われる。各短冊の紙質はさまざまである。

文献的なことを記してゆくと、裏表紙内側に「天保十二辛丑年十二月中旬調之」の識語が記されている。天保十二年は西暦一八四一年で、杉田作郎著『日向俳壇史』によれば、赤江城ヶ崎の俳人小村明之が「来た道をさぐりつくれば枯野哉」の辞世の句を残して六十七歳で没した（十一月廿七日）年で、また延岡では島津五木が五十五歳で俳論書「俳諧素玄問答」を「多計都惠集」（たけつえしゅう）に付載して刊行し、その年以降大阪に移住した年（山口保明氏の宮崎日日新聞連載の「先達逍遙」<sup>③2</sup>・昭和63・8・18付による）である。しかしその他のこと、編者、所持者、その他奥書的なものは